

糸状体単胞子放出の抑制について

三井所正英・中尾義房

まえがき

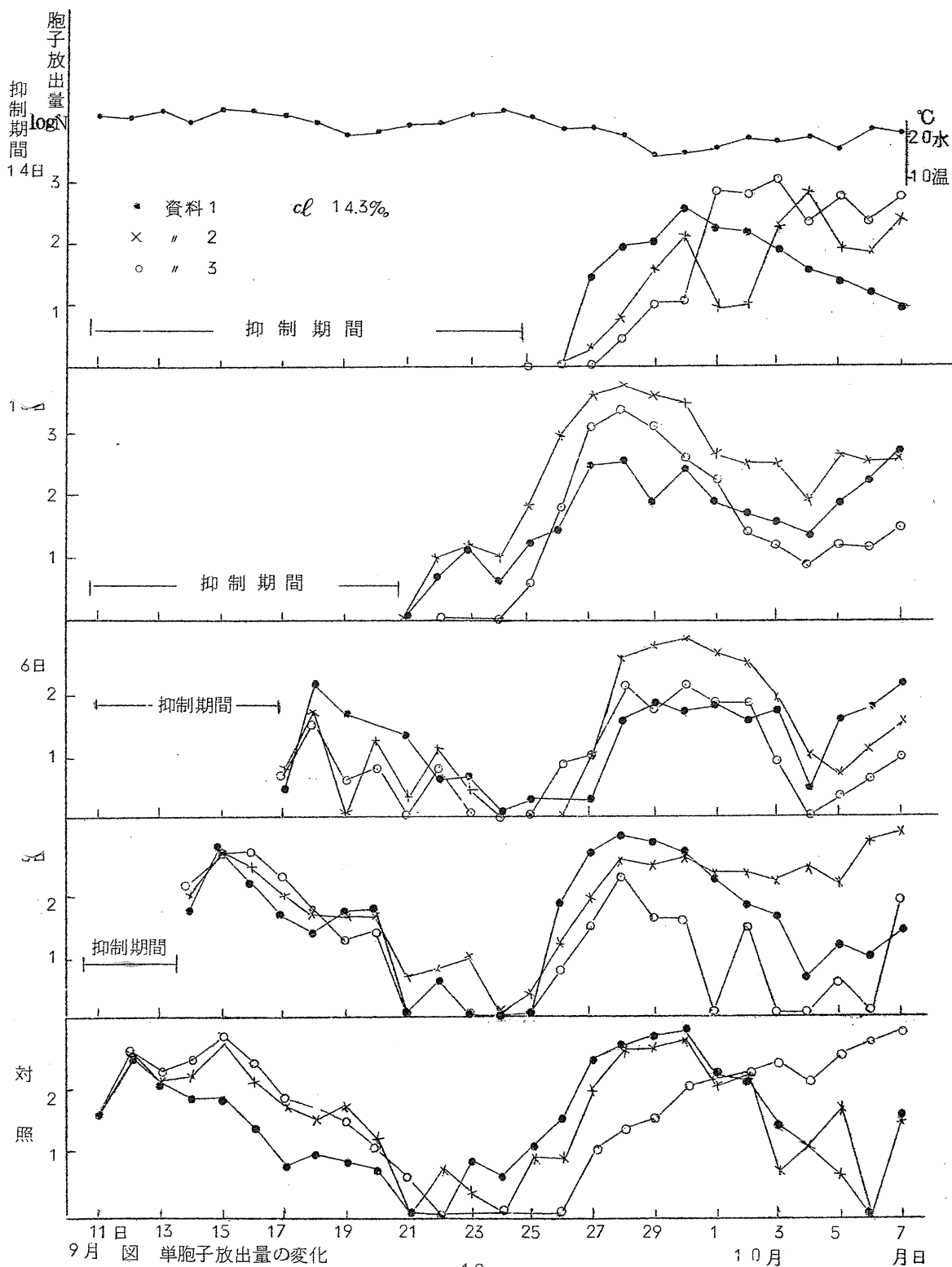
糸状体を水蒸気飽和気中に収容して、一定期間放出の抑制を行ない、その後の放出の状況について実験したので結果を報告する。

実験方法

糸状体カキ殻3枚を用い、1枚の糸状体カキ殻から約1cm²の細片5個をつくり、それぞれの処理区にわけ、各処理区に3組用意した。この糸状体を9月10日に水蒸気飽和のデシケータ内(暗所)に収容し、3・6・10・14日後に3個宛取りだし、それぞれ管瓶に移した。毎日午後3時以後糸状体を新しい管瓶に移し、あらかじめ管瓶の底部に入れたガラス円板(直径約3cm)を静かに取りだし、円板上に沈澱した単胞子数を倍率100倍で50視野(1視野約0.58mm²)について計数し、合計値をもって単胞子の放出量とした。

結果および考察

結果は図に示した。胞子の放出週期は対照区とほぼ同じ傾向が認められた。対照区・3・6日処理区は2回の放出の山がみられており、放出の谷にあたる時期に取りだした10日処理区は、およそ5日後から次第に放出量は増加している。このことからこの処理を10日前後以上続ける場合、放出の週期に留意して採苗する必要がある。処理期間が長い場合でも多くの放出がみられ、処理期間の長短による放出の影響はみられず、水蒸気飽和気中での露出に強いことがうかがえる。



9月 日 単胞子放出量の変化